

土木学会昭和 43 年度全国大会経過報告

土木学会中部支部

1. はじめに

本年度から年次学術講演会は通常総会と切り離して行なわれることになり、10月11日より3日間にわたって名古屋大学で開かれた。従来の1日半の講演会期が3日間に延ばされたため、いろいろと新しい試みが行なわれた。第1日目の10月11日9時より12時まで特別講演会が名古屋大学豊田講堂で開かれたのを皮切りに、11日～13日に一般講演が名古屋大学教養部の13会場に分かれて行なわれ、その間に各部門ごとに多くの聴講者を集めて部門講演が行なわれた。また、一般講演と併行して

写真-1 特別講演会場につめかける参加者



写真-2 受付をすませる参加者



発表者や聴講者の息き抜きのために、土木技術映画や中部地方の行事・風景を紹介する映画が盛り沢山に上映された。さらに、名古屋大学における学術講演会のほかに、今年の一つの特色として、一般市民を対象としてPR講演会が中電ホールで開催され、土木工学の社会における役割や国民生活との関連などについて、大いにPRが行なわれた。

2. 特別講演会

特別講演会は10月13日(金)9時より12時まで名古屋大学豊田講堂で行なわれた。従来の年次学術講演会における総合講演会にあたるものである。豊田講堂の定員1200名に対して、講演の始まる頃にはすでに700名ばかりの聴講者が集まり、その中には名古屋市内の大学生諸君の姿も多く見かけられた。東海道新幹線による交通の便のために、関東と関西地区の会員の特別講演への出席率が低いのではないかと関係者一同心配していたが、まずまずの出足で一安心した。10時ごろには約900名に増え、つぎの3氏の講演を興味深く拝聴した。

写真-3 特別講演会場

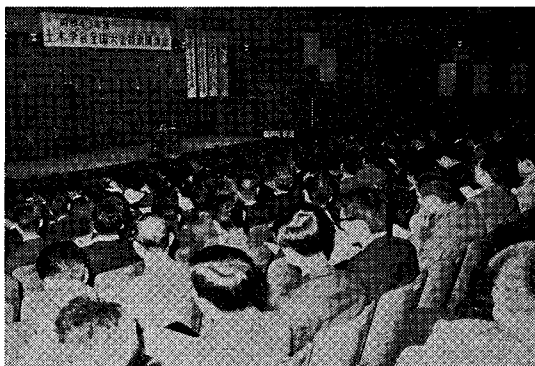


写真-4 大会を取材する報道関係者



講演会は土木学会中部支部幹事長・建設省中部地建企画室長黒田 晃氏の司会により、土木学会中部支部長・中部地建局長佐々木正久氏の挨拶から始められた。続いて最初に、土木学会長・京都大学教授 石原藤次郎氏の「わが国の水問題について」と題する講演が行なわれた。石原会長は、わが国の水問題は、最近、複雑化し多様化して、将来の発展にも大きく影響すると思われるが、その解決の基盤となる科学技術が貧弱であって体系化が非常に立ち遅れていると指摘し、この事実は世界的な傾向であって、そのために、今後の生活水準の向上が水問題に対する解決策のとり方いかんにかかっているという共通した問題意識にもとづいて、水問題の本格的な検討が世界各地で活発に行なわれていることについて述べている。そして、多くの討議を通じて明らかにされた水に関する諸問題のうちで、特に土木工学上の課題について触れ、わが国の水資源および治山・治水、都市用水・工業用水、農業用水、自然環境の保護などの水問題の分析について説明し、最後に水問題解決への一つの方向を指示して講演を終られた。

つぎに、動力炉核燃料開発事業団理事長 井上五郎氏により「エネルギーの長期展望と動力炉の開発」と題する講演が行なわれた。講演では、まず、世界における原子力発電開発の趨勢および世界のエネルギー需要と燃料資源について語られ、これら諸外国の情勢との比較において、日本におけるエネルギー需給の展望が述べられた。さらに、核燃料サイクルと原子炉形式について説明があり、特に日本における動力炉開発の方向および原子力に期待されている役割について述べられた。

最後に、東京工業大学教授 林雄二郎氏の「未来学の意義と方法」と題する講演が行なわれた。未来学という新しい言葉が最近ちらほら聞かれ出したが、未来学という名の話がこの学会に出るのは始めてで、会員に新鮮な興味を与えたように思われる。林教授は、まず未来予測の必要性から技術革新の将来について触れ、技術というもののフロンティアを上げないと、いわゆる社会的ひずみを解決することができないこと、また現在、量的な変化の予測から質的な変化の予測への転換が重要な問題となり、質的な変化を考慮に入れたまったく新しい予測の方法論を開拓することの必要性などについて述べている。また、この問題解決のために、従来のパッチカルな方向での技術進歩だけでなく、自然科学、社会科学、人文科学などの各系統にわたってのホリゾンタルな方向での技術進歩が要求されるとして、メタディシプリナリーな手法の意義とその限界について説明されている。さらに、社会の質の変化の一つとして情報化の問題をとり上げ、具体的な説明が行なわれ、質的な変化を取り扱う場合に出てくる価値観の違いと可能性の選択との関係について話が進んでいる。最後に、技術革新が激しくなればなるほど、

写真-5 特別講演会場を出る参加者



建設の科学と平行して、破壊の科学というものが起こってこなければならぬことや、土木や建築の分野ですでに破壊工学なるものが考えられてきていることなどを述べ講演を終られた。

3. 第 23 回年次学術講演会

3.1 部門講演

部門講演は本年度に新しく加えられた試みであり、各部門における最近の話題を、日ごろその部門に関係を持たない、いわゆる専門外の会員にも紹介することを考慮して行なわれた。講演は 10 月 11 日～13 日の午前、午後各部門 1 時間ずつ、その部門の一般講演 (3 会場) 時間をあけて、教養部第 6 講義室 (300 名収容) で行なわれた。講演題目と講演者はつぎのとおりである。

第 I 部門 構造力学の最近の進歩

——とくに有限要素法について——

名古屋大学教授 成岡昌夫

第 II 部門 水理学研究の最近の進歩と現況

相似律とインストルメンテーション——

——の問題を通してみたものを中心として

中央大学教授 林 泰造

第 III 部門 土の動的性質

名古屋大学教授 市原松平

第 IV 部門 交通計画の最近の問題

京都大学教授 米谷 栄二

各部門とも満員の会員でうまり、興味ある各講師の講演を熱心に聴講していた。部門講演会は成功裡に終り、会員諸氏の評判もよかったが、初めての試みのために聴講者数の推定ができず、300 名収容の大教室でも狭い状況で、教室後部の聴講者にはスライドや掛図の図表が見えない状態であったのは残念であった。今後、さらに工夫を要すると思われた。

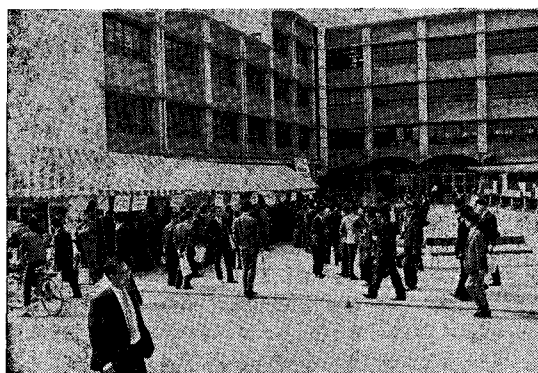
3.2 研究発表

本年の研究発表論文数は、第 I 部門 (応用力学・構造力学・橋梁等) 211 編、第 II 部門 (水理学・水文学・河川・港湾・海岸工学・発電水力・衛生工学等) 213 編、第 III 部門 (土質力学・基礎工学・土木機械・施工・トンネル等) 131 編、第 IV 部門 (鉄道・道路・コンクリートおよび鉄筋コンクリート・土木材料・交通・都市計画・測量等) 200 編の計 755 編であり、これを各部門 3 会場、計 12 会場に分けて講演発表が行なわれた。昨年の発表件数より 20 数編増加しているのに対して、本年度の一般講演は 2 日半にわたって行なわれたため、第 I、II、IV 部門では 1 講演あたり 13 分、第 III 部門では 15 分の時間が与えられた。そのため、第 I 部門では全講演が個人発表となり、持時間いっぱいまで十分に使って研究成果の発表を行なえるようにし、他の

写真-6 研究発表会場へ向う参加者



写真-7 受付をすませる一般講演参加者



部門では従来どおり一般報告と個人発表とが併用されたが、後者の比率が増加している。個人発表の司会者および一般報告者には、質問時の問題提起などを考慮して、年長の学識経験者を配している。本年度の発表者を見ると、学校関係者によるもの558編74%、学校関係者以外のものが197編26%で、そのうち学校関係と共同執筆のものが72編9.5%、全く学校関係者以外によるものが125編16.6%となっており、学校関係者以外の発表件数が昨年より3%ばかり減っている。各部門における司会者、一般報告者および聴講者数はつぎのとおりである。

(1) 第I部門

司会者:

川本 脱万 山内 利彦 大村 裕 橋 善雄 能町 純雄
 渡辺 昇 山本 稔 倉田 宗章 平井 敦 前田 幸雄
 米沢 博 小西 一郎 喜内 敏 島田 静雄 大久保忠良
 村上 正 小松 定夫 伊藤 学 島山 直隆 成岡 昌夫
 畑中 元弘 西村 俊夫 山崎 徳也 小坪 清真 菊池 洋一
 吉田 俊弥 吉村 虎蔵 西村 昭 大地 羊三 山田 善
 田島 二郎

(2) 第II部門

司会者:

足立 昭平 永井莊七郎 春日屋伸昌 木村喜代治 境 隆雄
 荒木 正夫 杉木 昭典 久宝 雅史 田中 茂 富永 正俊
 小川 元 吉川 秀夫 徳平 淳 増田 重臣 細井 正延
 栗谷 陽一 西畑 勇夫 井口 昌平 松本順一郎 高松武一郎
 佐々木大策 栗津 清蔵 山本 剛夫 長尾 精 杉尾捨三郎
 末石富太郎

一般報告者

岩崎 敏夫 千秋 信一 上田年比古 尾崎 晃 室田 明
 嶋 祐之 岩垣 雄一 日野 幹雄 土屋 義人 横木 亨
 堀川 清司 岩佐 義明 権貝 博美 足立 昭平 土屋 昭彦
 高棹 琢馬 金丸 昭治 岸 力 村本 嘉雄 石原 安雄
 橋 東一郎 高橋 裕 山岡 勲

(3) 第III部門

司会者:

植下 協 柳場 重正 門田 博知 木村 孟 山村 和也
 藤本 広 川上 浩 浅田 秋江 吉田 信夫 清水 英治
 最上 幸夫 鈴木 健夫 松尾 稔 宇野 尚雄 越賀 正隆

一般報告者

谷本 喜一 岡本 舜三 松尾新一郎 久野 悟郎 石原 研而
 小田 英一 後藤 尚男 柴田 徹 北郷 繁 西田 義親
 山内 豊聰 三木五三郎 網干 寿夫 伊藤 富雄 森 麟
 河上 房義 島 昭治郎 三笠 正人 山口 柏樹 筋内 寛治

村山 朔郎 赤井 浩一

(4) 第IV部門

司会者:

毛利 正光 丸安 隆和 猪股 俊司 枝村 俊郎 吉川 和広
 藤田 嘉夫 鈴木 忠義 植下 協 松本 嘉司 加藤 晃
 岡田 清 村田 二郎 天野 光三 徳光 善治 樋口 芳朗
 佐佐木 綱 大浜 文彦 荒木 謙一 五十嵐日出夫 渡辺 隆
 西林 新蔵 水野 俊一 越 正毅 菅原 昭雄 富堅 利男
 新谷 洋二 近藤 時夫 林 正道 山田 順治 森島宗太郎

一般報告者

長尾 義三 星 埜 和 井上 孝 内田 一郎 毛利 正光
 米谷 栄二 渡辺 新三 八十島義之助

聴講者数

区分	会場	10月11日(金)		10月12日(土)		10月13日(日)	
		午後	午前	午後	午前	午後	
第I部門	物理講義室	80	100	130	60	50	
	化学講義室	130	110	100	—	—	
	第5講義室	95	120	110	150	120	
第II部門	心理学講義室	100	170	120	150	150	
	35番教室	120	100	100	70	90	
	保健体育室	120	90	100	120	40	
第III部門	地学教室	150	150	110	90	90	
	生物学講義室	90	90	80	90	70	
	第1講義室	—	—	80	20	—	
第IV部門	第2講義室	20	70	60	50	50	
	第3講義室	120	100	100	90	60	
	第4講義室	140	160	130	120	20	

4. 映画会

第6講義室では、部門講演に引き続いて映画の上映が3日間に行なわれていた。一般講演と併行して行なわれたため、参加者は毎回40~60名程度であったが、連日の研究報告での緊張した空気をほぐし、息抜きをする格好な場所として喜ばれていた。最近の土木工事や技術を紹介したものや、中部地方の行事・風物を紹介したものが上映された。映画プログラムはつぎのとおりである。

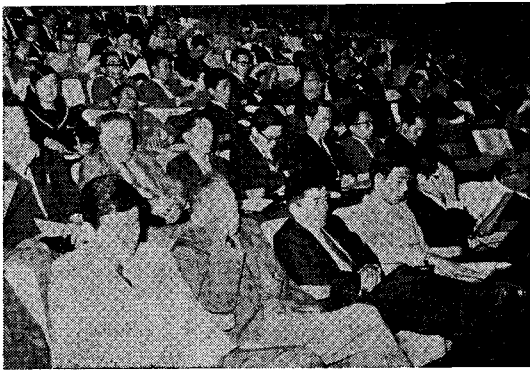
11月11日(金): 東名小牧高架橋(昭42, 道路公団), 渋谷ディビダーク橋(昭39, 鹿島建設), 超高層のあけぼの(昭40, 鹿島建設), 伸びゆく新幹線(昭42, 国鉄), 新しい愛知をひらく(昭41, 愛知県)

10月12日(土): 港と背後地(昭42, 名古屋港管理組合), 鹹水不尽(昭39, 名古屋市), 名古屋まつり(昭42, 名古屋市), 飛驒(昭42, 中部電力), 砂防(昭42, 建設省), 横山ダム(昭39, 建設省)

10月13日(日): 矢の川をこえて(昭40, 建設省), テレビ塔地下鉄工事(昭41, 名古屋市), 小松ロビンソン式岩盤掘削機(昭41, 熊谷組), 海の新土(昭40, 建設省), 豊川放水路(昭40, 建設省), 中部は一つ(昭42, 愛知県)

5. PR講演会

PR講演会は10月12日(土)午後1時より中電ホール(465名収容)に350名の聴講者を集めて行なわれた。中部電力水力部 大沢 勲氏の司会で、日本大学国土総合開発研究所長 鈴木雅次氏の「国民生活と土木」、名古屋市長 杉戸 清氏の「都市計画の問題点——その不徹底について——」と題する講演が行なわれ、また、両講演の合間に、映画「飛驒」と「千日の記録」が上映された。PR講演会のはじめての試みであり、また講演会



当日は名古屋まつりとも重なって、聴講者の出足が心配されたが、まずまずの聴講者数であった。この講演会は一般市民を対象として計画され、土木工学が国民生活といかに結び付いているかをPRするために行なわれたものであって、当日の聴講者にはかなりの年輩の方が多く、ご婦人の姿もちらほら見受けられた。また、名古屋市周辺の工業高校の生徒も40名ばかり参加し、年次学術講演会に参加の御年輩の会員も30名程度出席していた。土木における技術や仕事が一般市民にさらに理解され、親しみを持たれるようになるよう、このような講演会を今後も続けて行ないたいものである。

6. 懇親会

10月12日(土)18時より豊田ビル大ホールにおいて懇親会が催された。11日(金)より始まった第23回年次学術講演会等をはじめ諸行事も順調にすすみ、大会気分も盛り上がったところでの懇親会ということで、参加者も500名の多数にのぼった。

まず、実行委員長 佐々木正久氏の挨拶に始まり、会長 石原藤次郎氏の挨拶、続いて、名古屋市長 杉戸 清氏、名古屋大学学長 篠原卯吉氏のお祝いの言葉があり、副会長 松見三郎氏の発声で乾杯、開宴となった。

例年と異なり、講演会も今年から秋の開催である。10月ともなると、名古屋もめっきり涼しくなり、夕方など、少々肌寒さを感じずるほどであった。会場は、その後も参集する会員で満員となり、なごやかな談笑が各所でくり広げられた。

宴もたけなわ、やがて、地元中村民謡劇団のメンバーによって、名古屋甚句、茶切節、郡上節、伊那節、越中小原節、尾鷲節、山中節など、なじみの民謡、おどりがつぎつぎと披露され、しばしときの経つのも忘れるほどであった。最後に、中部工大副学長 結城朝恭氏の発声で万才三唱、盛大に幕を閉じた。

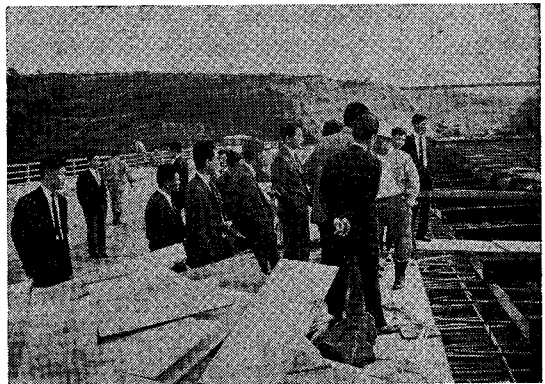
7. 見学会

(1) 第1班(東海道方面/10月14日~10月15日)

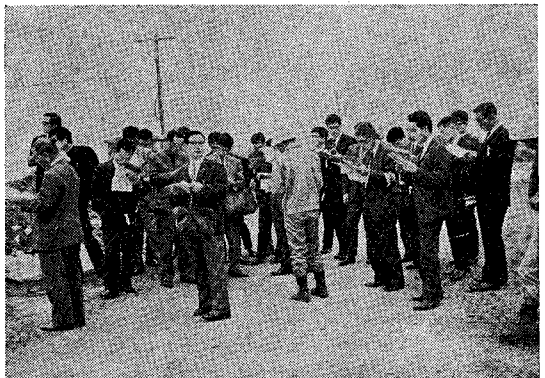
第1班の一行30名、名古屋テレビ塔下を8時出発、東名高速道路名古屋インターチェンジに向う。ここ二、三日名古屋地方はめっきり寒く、当日はそのうえどんより曇り、雨を気にしながら一行は出発した。現在、営業区間の一つである岡崎インターチェンジまでの走行は、まことに快適そのもの、名神高速道路と比較しての説明に一同耳を傾けた。9時前に岡崎インター

チェンジに到着し、ここよりいよいよ建設工事中の区間に第一歩を踏み入れる。ここから浜名湖大橋まではほとんど完成し、舗装工事が、急ピッチで進められているため、上り線を走ったり、下り線に移ったり、多少右往左往したが、走行は非常に快適で予定どおり10時30分に浜名湖サービスエリアに到着した。ここで現在架設中の浜名湖大橋の説明を聞いたのち、浜名湖を見おろす場所に、むしろをひいて昼食をとる。どうやらこのころより空がかなり明るくなり、雨の心配はまずまずなさそうに思われた。浜名湖大橋は、床版が完了していないので徒歩でわたり、12時10分ここを出発した。これより袋井インターチェンジまで、工事途上の高速道路を走り、ここからは、部分的に走行不能箇所があるため、国道1号線に出た。月曜日であるためか、さしもの1号線もおどろくほど車が少なく、予定より早く14時30分に静岡インターチェンジに着く。ここより、再度営業区間の高速道路にのり、登呂の遺蹟を左に見すごし、有名

写真—9 工場場をみる参加者



写真—10 熱心に説明を聞く参加者



な由比地区を通過し、15時10分には富士インターチェンジに到着、ただちに静岡県富士臨海地区総合開発事務所に行く。

事務所の屋上で田子浦港を見ながら、説明を聞く。15時40分、ここをあとにし、1号線経由で沼津市に入り、静浦の静かな海を右に見ながら狩野川放水路に到着、ここより、放水路にそって走り、17時、本日の宿舎、伊豆長岡温泉「かつらぎ館」に着く。早速みな温泉に入り、11日からの疲れをいやす。18時より懇親会、今日見学した東名高速道路の話、各地方の話など、いつまでもつきなかつた。今日は曇っていたため、富士山は全く見えず残念だったが、雨が降らなかつたのが、せめてものなぐさめであった。翌日は9時に宿舎を出発、沼津市まで、三島市経由でバックし、ここより工事中の愛鷹パーキングエリアに

入り、御殿場に向ったのであるが、沼津東部地区は、西部地区に比較して、用地問題をはじめとし、技術的にも火山灰の処遇などの問題があり、工事がやや遅れているため、工事用道路に出たり、また本線に入ったり、雄大な富士の裾野を走り、12時に御殿場インターチェンジに到着した。ここで昼食を済ませ、乙女有料道路をとおり、小田原駅に14時到着、無事全日程を終了了解散した。(中部地建 志水茂明・記)

(2) 第2班(飛騨・信濃方面/10月14日~10月15日)

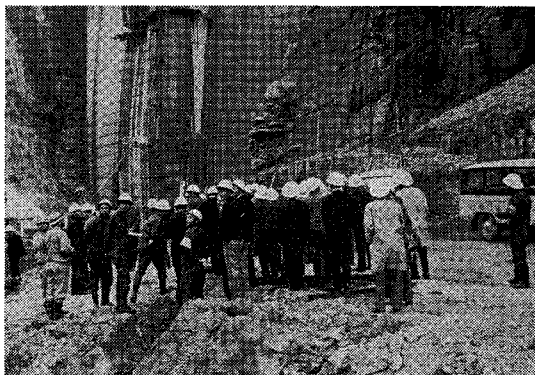
2台のマイクロバスのうち1台が故障のため、やむを得ず約半数の27名が7時30分先発した。360年ほど前には人口5万人ほどの城下町であった名古屋も、今では人口200万を数える近代都市となったが、名古屋城の築城と堀川開削の大土木事業をやりとげた先人の偉業は全く敬服のほかはない。小牧空港をすぎ、小牧・長久手の古戦場をみて犬山橋で木曾川を渡り、日本ラインぞいに中仙道をしばらく走り、美濃加茂市で国道41号線を飛騨川ぞいに登った所が今日の目的地である高根ダム工事現場である。川辺ダムの青く澄んだ水を右下に見おろしながら進み、飛騨川本流にかかった橋梁を左岸に渡ると山が急に迫り、深く侵食された岩場と山の緑の対照が美しい。この飛水峡で去る8月下旬のバス転落事故があったとはとても信じられない良い道路だ。ご遺族がそなえたのであろう、道端の生花のみがわずかにそれを知らせている。一同車中より黙悼をささげる。このあたりから右に左に水力発電所が次々と目に入ってくる。飛騨川の電源開発は大正13年の瀬戸発電所完成に始まり、七宗、上麻生、大船渡、小坂、名倉、川辺、下原の各発電所がいついで建設され、さらに戦後朝日、秋神ダムの貯水池式発電所を先駆として、東上田、久々野、新小坂が順次開発された。新旧とりまぜた30万kWの既設設備で飛騨川の年間総流量の約40%が発電に使われているとのことである。やがて下呂温泉の町をとおり、国鉄久々野駅前より41号線から県道高山福島線に入った。急に道幅がせまくなり、あわただしい工事現場の空気を感ずる。紅葉と緑の緑につつまれた山々をしばしみとれていた目前に突然姿をあらわした巨大なコンクリート・朝日ダム。目ざす高根はそのすぐ先にあった。

天候がくずれはじめ、雲がかかって御岳も乗鞍もみえない。標高1000m以上の当地は、もう室内にはスチームをとおしている。昼食後、福島高根建設所長より工事概要の説明を聞く。飛騨川開発計画150万kWの先駆をなす高根、133mのアーチダム、69mのホローグラビティダム、34万kWの全地下揚水式の第一発電所、25万kWの半地下式第二発電所等、工程は順調にすすみたん水開始の日も近い。このころ後続車が約1時

写真-11 高根第一ダム工事現場におりたった参加者



写真-12 奈川渡ダムを見上げる参加者



間おくれて到着みな一安心する。入れ替って現場に向かう。アーチダムは上部の一部分を残すのみでほとんど完成し、峻険な谷間に美しいドームをあらわしていた。このころから雨が降り出し、シャッターを切る手にかかる。ゆっくり見たいが今日の行程は250km。まだこれから乗鞍山麓平湯温泉までゆかなければならない。14時30分高根発すぐ下の第二ダム発電所の現場で下車、見学して一路平湯にむかう。雨は小降りとなったが、霧にさえぎられて遠い山は見えない。17時温泉着。山の湯にひたって、しばし我を忘れる。18時から大広間で水越東電安曇開発副部長より安曇開発計画全般と設計施工面などの説明を聞く。続いて懇親会食。60年前の学生のころ登山しこの地にきたことがあるという最年長の上村氏の音頭でまず乾杯。中部地方の民謡が流れる会場はいよいよにぎやかになってゆく。20時門沢氏の発声で万才三唱。その後安曇関係の映画「礎」と高根関係の映画「飛騨」を観賞した。第2日10月15日8時平湯温泉発。安房峠中の湯を経てすすむと付替道路の橋梁架設が目につく。霧も晴れ遠い山、眼下の川にも日がさしてきた。9時30分奈川渡ダム着。三村第一建設所長より工事概要の説明を聞く。11月1日ずい道バイパスを閉そくして堤内バイパスに切りかえ、来年3月下旬から本たん水のよし。1億2000万tの大人造湖と高さ155mの巨大なアーチダム出現も目前に迫っている。ダム上部右岸のビルはコントロールセンターで川筋9カ所の発電所をここで遠方制御するそう。完成後はダム頂部が国道となり、上高地に至る観光ルートとなる。ダムの直下の発電所では、主要機器すえ付けの真最中。事務所で昼食をとり水殿に向う。水殿ダムは95.5m、約80%くらい打上がった感じ。佐藤第二建設所長から説明を受ける。この貯水池は奈川渡揚水の下池となる。発電所は安曇と同じダムのアーチに沿った扇形の建屋である。完成した稲核ダムはバスの窓から眺める。10月6日河水の切り替えを終り、年末には越流頂部まで貯水するとのこと。もうすぐ北アルプスの玄関に96万kWの大電源地帯が出現する。ダムの見学を終えて島々の下流花見地籍にある骨材プラントをみて、無事2日間の行程を終え松本駅に向う。バスの両側には手のとどきそうなところに赤い見事なりんごがみのり、遠くの山には真白い雪が日に映えていた。(中部電力 大沢 勲・記)

(3) 第3班(伊勢志摩方面)10月14日~10月15日

第3班の参加者30名は8時過ぎ名古屋の中央にあるテレビ塔下を出発し、伊勢志摩方面に向かった。

途中、中部地建の係員から名古屋周辺の道路事情や道路計画についての説明を受け、名四国道をとって四日市へ……。

四日市では林立する煙突や工場のパイプ配管などを車窓に見

ながら公害問題などを車内で話し合う。

四日市で名四国道の西部の延長工事である四日市高架橋工事や1号線の追分バイパスの工事を見学し、市街地で行なう工事の問題点、特に杭打ちなどの騒音や振動の問題につきいろいろと検討を行なった。

1号線から23号に入り、平行して走っている国鉄伊勢線の工事を車中より見学し、松阪で名物の牛肉弁当で腹ごしらえをして伊勢に入った。

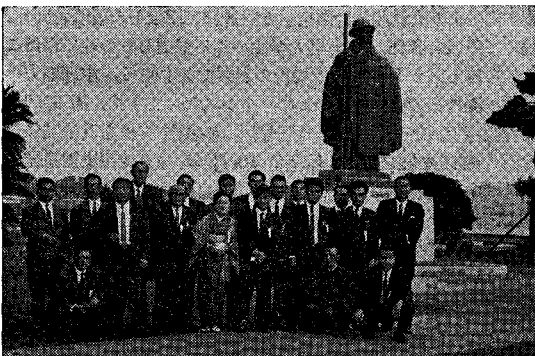
天気が生憎の小雨模様であり、から傘をさしての参拝となったが、雨の神宮もまた落着いた趣のあるものであった。昭和48年には遷宮が行なわれるようで宇治橋などはすでに架替えのための仮橋工事が初められていた。こんなことを話し合い、玉砂利を踏み気持は日ごろのわづらわしさを忘れすがすがしいものであった。

続いて朝熊山に開通した「伊勢スカイライン」を通過した。車窓からの眺望が売り物のこのスカイラインも生憎の天気でガスに包まれ全々眺望がきかず、参加者はみな日ごろの行ないを反省？し次回の天気に期待した。

こんな天気でバスの足は早く早々に宿に着いた。

宿では全員参加の懇親会を行ない、地元の銘酒に舌つづみを打ったり、また名物の「伊勢音頭」を楽しんだりしながら、十年の知己のごとく打ちとけ、なごやかな交歓を行なった。

写真-13 真珠のふるさとでの記念撮影



翌15日は昨日とは打って変わっての快晴。参加者の顔もまた日本晴れというところ。

特別仕立の遊覧船で島めぐり、得意のカメラで点在する島々の写真を撮ったり、船頭さんに真珠や魚のことを聞いたりして思い思いに楽しい時間を過ごした。

真珠の博物館「パールアイランド」を見学したのち水中翼船で伊勢湾の海の銀座 伊良湖水道を翼走し、蒲郡の港に入った。最後の昼食をともにしながら講演会のことや見学会のことを話し合い、また再会することを固く約束して三々五々帰途ついた。
(中部地建 小林芳夫・記)

(4) 第4班(北陸方面/10月14日~10月15日)

総勢30名が1台のバスで栄テレビ塔下を定刻に出発。曇り空であったが2日間の飛騨路、北陸路の好天を祈る気持は全員にあったことと思う。東名・名古屋インターチェンジに向う途中、名古屋市交通局杉戸係長より名古屋地下鉄東部延伸工事について説明を聞く。目下建設中のインターチェンジ付近の駅前が坪30万と聞き驚く。東名高速道路はわずか18分のドライブで小牧インターチェンジより国道41号線に入る。あとは富山まで230km余のドライブである。木曾川大山橋で岐阜県に入ると、右側は木曾川ライン下りである。奇巖、奇石が美しい。ライン下

りを終った船は今はトラックでこの国道を登るといふ。自動車時代である。9時中仙道分岐点を過ぎ飛騨路へ入る。中部地建上条課長より41号について説明を受ける。幅員8.5mの山岳道路がキロあたり1.5億円から2.0億円で建設されているという。工費の節減に苦心されたのが、現実には走ってよくわかる。104名の犠牲者を出した飛騨川災害については、山岳道路における沢の処理および交通規制について問題を提起したという説明に同感する。たしかに災害防止工事が目立つ。事故現場では参加者より停車の希望があり、10分間臨時停車し問題の沢を見る。あとは途中「モーテル飛騨」で20分の休憩をとったが、高山市まで快適なドライブが続いた。車中より声あり「暖房が入らないか」。ガイドさんの「冷房ならすぐ入りますが」の返事に皆吹き出す。商工会議所で上条課長および高山国道山下係長より高山国道の改良工事について説明を聞き昼食。食後一同揃って民俗館、陣屋跡等、小京都といわれる市内見学。予定より40分遅れて出発。神岡町でコンクリート舗装工事、スノージェット工事を吉村神岡出張所長の説明で見学。雪に対する苦心が

写真-14 スノージェットの説明を聞く参加者



写真-15 富山新港を見学する参加者



うかがわれた。富山県道路維持課 藪田課長代理が県境で同乗される。富山市で国道8号線に入り宇奈月に向う。滑川市、魚津市、黒部市と過ぎ、ホテルイカ、蟹気機など藪田課長代理の軽妙な案内を受け、予定どおり17時ホテル到着。懇親会は森富山県土木部長より富山県の概要についてお話しがあり、関東学院大学 平川、氏家両教授のスピーチ、乾盃で始まった。酒の多いにぎやかな宴会であった。

翌15日朝は雨であった。8時出発、富山市の製薬工場広貴堂を見学する。無形文化財「六神丸製造」などを見学。土産に菓袋をいただいでつぎの富山新港に向う。新湊市富山新港現場で

は金山局長より概要説明を聞く。水面積 180 万 m² の放生津潟に新港を造り、このしゅんせつ土砂で背後地に 300 万坪の工場用地を建設する大事業で、一部 4 月に開港しソ連船が木材を積下るし中であったが、伸びゆく新産都市を象徴しているようであった。再び 8 号線、160 号線を走り氷見市公会堂で昼食。特製鎌ずしに舌つづみを打つ。13 時最後の見学地胡桃の地すべり災害復旧工事現場に向う。約 150 ha の規模の地すべり現場で、富山県砂防課 西田補佐、富山土木出張所 川島係長から詳しく説明を受ける。3 時間にわたって約 80 m すべったという。屋でありまた前ぶれがあったため犠牲者が出なかったことが何よりと思う。最後に記念写真をとり帰路につく。高岡解散は予定どおり 15 時であった。朝は雨であったがすぐあがり、解散のときは雲一つない快晴となり、和気あいあいのうちに 2 日間にわたった見学会を終えることができたことを有難く思う。最後にご多忙の中を懇切な説明とご援助をたまった関係各位に厚くお礼申し上げる。

(愛知県 大橋雄六・記)

(5) 第 5 班 (名古屋市付近/10 月 14 日)

名古屋市自慢の 100 m 道路の中央にそびえるテレビ塔の隣に観光バス専用の駐車場がある。ここに土木学会見学班のバスが早朝勢揃いした。第 5 班の市内見学班は、午前 8 時 30 分集合、50 名の参加者は 1 台のバスに乗り、明治村、日本ライン下りという付録まで付けて、市内見学に出発した。市内見学というと観光が主のように聞えるが、車窓から移り変わる風物を見物し、案内者の説明を聞くだけで都市計画の勉強になる。車中で名古屋土木局道路建設課長から名古屋市の戦災復興計画の規模、都市計画街路網の規模について説明が始まる。バスは 50 m 幅員の広い街路を走り、官公地区を通過する。50 m 幅員の南北街路の両側に、愛知県庁、名古屋市役所が新旧おのおの向い合せて建っており、両者とも堂々たるものである。この官公地区約 20 ha ほどで、周囲を 50 m の広幅員街路で囲み、その中を 30 m の街路で区画割され、その隣りに名古屋城を含めた広大な名城公園を配している。その中に国の出先機関、建設省中部地方建設局などの入っている合同庁舎、名古屋通産局、東海財務局、農政局など、その他の役所関係のビルが小公園の配置された中に建てられ、広い敷地をゆったりと使って配置されているのに眼を見はる。名古屋城を 1 時間ほど見学して再び車上の人となる。車は 50 m 幅員の国道 22 号を南、100 m 東西線に入

写真—16 明治村での記念撮影



る。都心の道路比率は 30% で欧米なみとか、100 m は東西 (延長 3780 m) 南北 (1740 m) の 2 本が T 字型に配され、特に中心部は 15~20 m の街路で碁盤の目に区画されているとの説明があった。なるほど車窓から眺めると、歩道の配された立派なものである。車は 100 m 東西線を終点まで走り、名古屋市東部にある東名道路の名古屋インター付近で工事中の名古屋市交通局地下鉄高架工事現場に到着する。工事事務所長より工事の概要について説明を聞く。連続ラーメン方式、PC 桁の橋梁方式の両者を取り入れ、特に河川の上を両岸に逆 V 型の脚をたてて PC 桁を連続して架設した高架方式が印象的であった。周辺は区画整理の施工中で盛んに宅地造成が行なわれつつあり、地下鉄の開通とともに将来の発展が期待される場所である。ここで記念撮影などして、つぎの目的地明治村に向う。現場のすぐ近くに名古屋インターがあるのでここから東名高速道路を小牧インターに向って走り、国道 41 号線をとって明治村に入り、昼食も含めて 2 時間 30 分ほど明治の人々が残した有名な建物、明治時代に使われ読まれた道具、書物などを見学して 14 時出発、日本ライン下りをすべく岐阜県今渡りに向う。幸い雨も少しばらついただけで日本ラインを無事下り、大山橋より再びバスの中の人となり、名古屋駅に 17 時 30 分に到着、有意義な一日を終り解散した。最後に中部支部の関係者各位ならびに見学会に便宜を与えて下さった各位に紙上より厚くお礼申し上げる次第である。

(名古屋市 三浦 侃・記)

▶ トンネル工学シリーズ 5

第 4 回 トンネル工学シンポジウム < 最新刊 >

B 5 判・268 ページ
1600 円・会員特価
1800 円 (〒 80 円)

ソ連の地下鉄/アメリカのトンネル工事を視察して/アメリカにおける山岳トンネル工法/アメリカにおけるトンネル掘きく機/アメリカにおける都市トンネル/アメリカにおけるコンサルタント業務/アメリカにおける請負工事の諸事情について/アメリカのトンネル施工に関する新技術/欧州のトンネル工事を視察して/欧州におけるトンネル請負工事の諸事情について/欧州における山岳トンネル工法/欧州におけるトンネル掘進機について/欧州のシールド工事/欧州における地下鉄工事/欧州における沈埋工事